

(資料5-1)

環境保全型農業直接支払交付金 最終年評価について

埼玉県農林部
農産物安全課

最終評価について

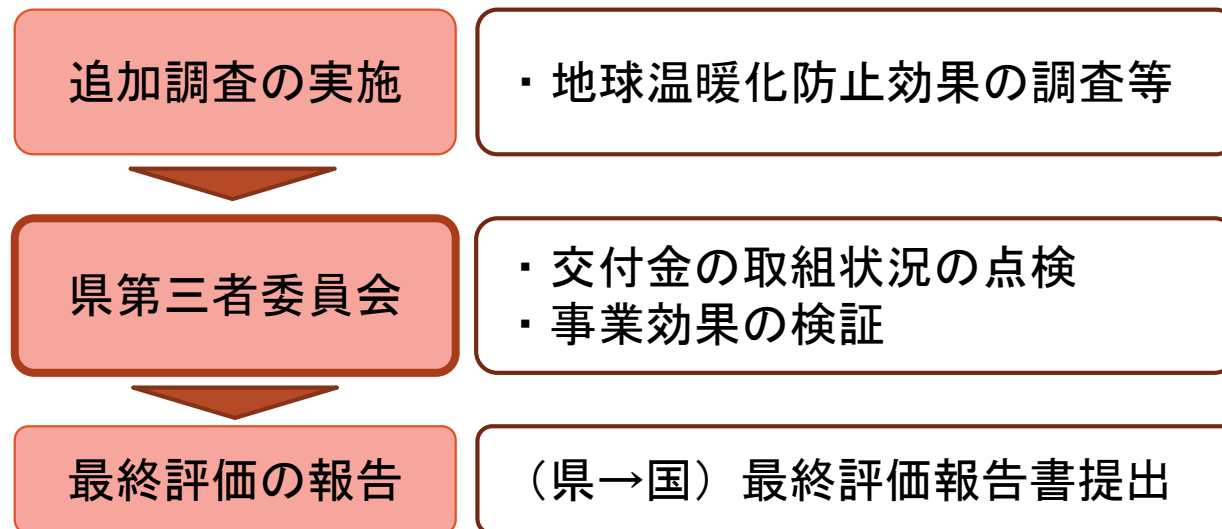
○環境保全型農業直接支払交付金の交付が計画的かつ効果的に実施されるよう、取組状況の点検や制度の効果等の検証を行い、施策に反映。



平成27年(「農業の有する多面的機能の発揮の促進に関する法律」施行)からの5年間を第1期とし、国の第三者委員会で、最終年にあたる平成31年度に最終評価を実施。

○都道府県の第三者委員会による最終評価を平成30年度に実施、その結果を踏まえて国の第三者委員会で平成31年度に最終評価を実施。

【平成30年度の流れ】



最終評価の内容

1 交付状況の点検

2 環境保全効果等の評価

- (1)地球温暖化防止効果
- (2)生物多様性保全効果

3 施策の点検及び今後の対応

(1)全国共通取組・地域特認取組

- ・効果を高めるために必要な取組について
- ・推進・拡大のために必要な取組について

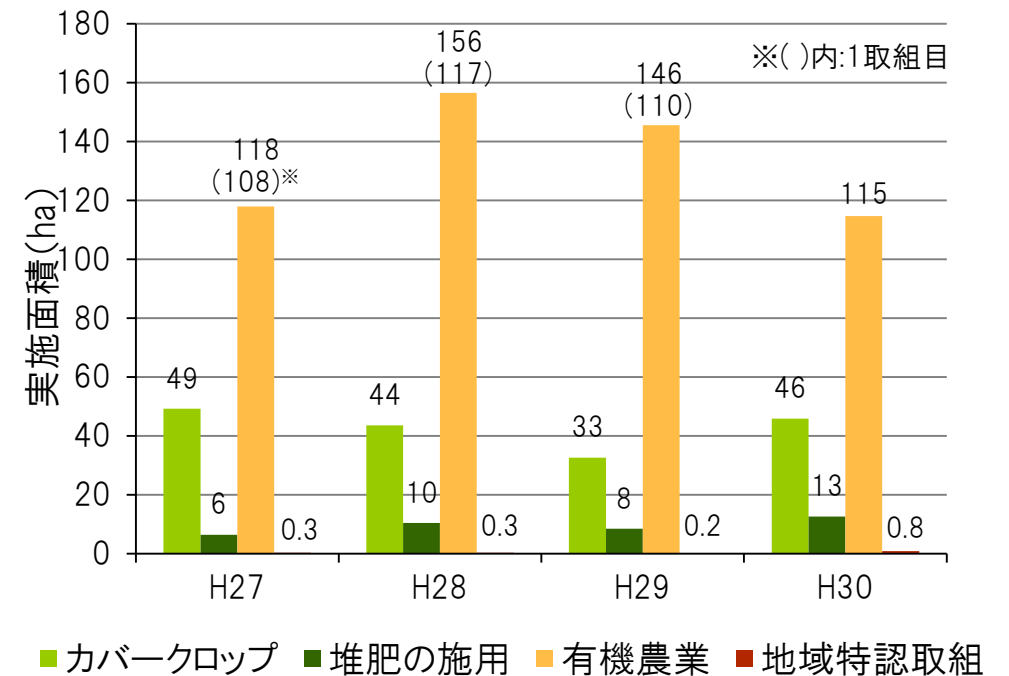
(2)地域特認取組

- ・実施状況及び効果測定調査結果
- ・今後の対応方針

1 交付状況の点検

項目		27年度	28年度	29年度	30年度 (見込)
実施市町村数		13	15	15	16
実施件数		43	35	35	34
交付額(千円)		13,249	14,645	12,074	12,696
実施面積(ha)		171	211	187	174
うち、1取組目		161	171	151	174
参考	特別栽培農産物 認証状況(ha)	1,281	1,167	1,221	—
	エコファーマー認定件数	1,142	970	722	—

取組別内訳



2 環境保全効果等の評価

環境直接支払による地球温暖化防止及び生物多様性保全効果を検証するため、調査を実施。

地球温暖化防止

- 有機農業
- カバークropp
- 堆肥の施用
- 地域特認取組
 - ・リビングマルチ
 - ・草生栽培

『土壌のCO2吸収
「見える化」サイト』
→土壌炭素を計算

生物多様性保全

- 有機農業
- 地域特認取組
 - ・冬期湛水管理

『農業に有用な生物多様性の
指標生物・評価マニュアル』
→マニュアルに基づき、生物の
多様性を調査

2-1 地球温暖化防止効果の評価

【調査対象取組】

追加

①有機農業（1件）

※生物多様性保全効果調査ほ場が対象

②カバークロープ（8件）

③堆肥の施用（3件）

④リビングマルチ（2件）

※草生栽培はH29の取組がないため、未実施

【調査方法】

農業環境変動研究センターが公開する『**土壌のCO₂吸収「見える化」サイト**』を用い、土壌中に貯留された炭素量を試算。

（手順）

自分の**管理と標準的管理**におけるほ場位置、作物、有機物投入量等を入力



- それぞれ土壌炭素量の変化
- CO₂削減量（標準的管理との差）



What's New

● 土壌のCO₂吸収量を簡単に計算できます。

本サイトでは、場所や管理の情報を入力すると、土壌のCO₂吸収量を計算することができます。あなたの畑のCO₂吸収量を推定してみませんか？

調べたい場所 + 管理方法 = 土壌のCO₂吸収量

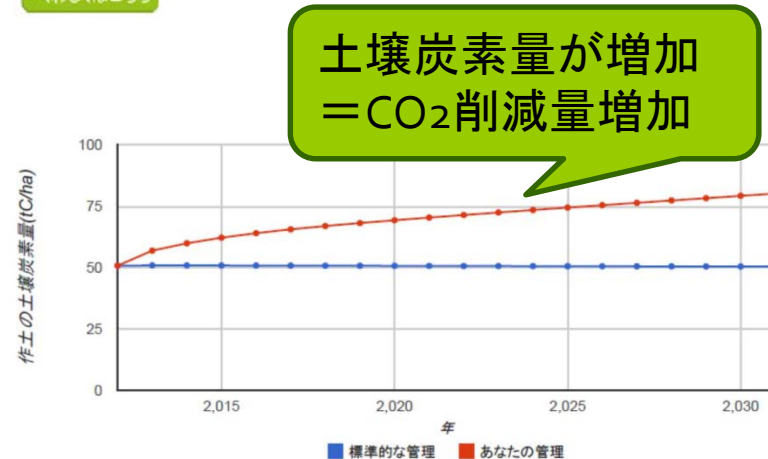
くわしくはこちら



● 土壌炭素量と地球温暖化

土壌中の炭素が増加すると、その分、大気中のCO₂を吸収したことになるので、地球温暖化の緩和に役立ちます。

くわしくはこちら



2-1 地球温暖化防止効果の評価

【調査結果】

プラス=効果が高い
 平成29年
見込み値→実績値
 再計算

	対象取組 ※()内は調査件数	単位あたり 温室効果ガス削減量 (t-CO ₂ /年/ha) ①	実施面積 (ha) ②	温室効果ガス削減量 (t-CO ₂) ①×②
追加 埼玉県	有機農業(1)	0.2	146	24.7
	カバークロップ(8)	1.7	33	54.8
	堆肥の施用(3)	1.3	8	10.5
	リビングマルチ(2)	修正 0.3	0.2	0.1
【参考】 全国	有機農業(48)	0.9	14,537	13,519
	カバークロップ(465)	1.8	18,398	32,564
	堆肥の施用(385)	2.3	19,890	44,951
	リビングマルチ(34)	1.0	1,790	1,826

【評価】

○カバークロップで最も効果が高い
 (要因)単位あたり削減量大きい、実施面積大きい

2-2 生物多様性保全効果の評価

【調査対象取組】

有機農業の取組(ネギほ場)

※冬期湛水管理はH29の取組がなく、未実施

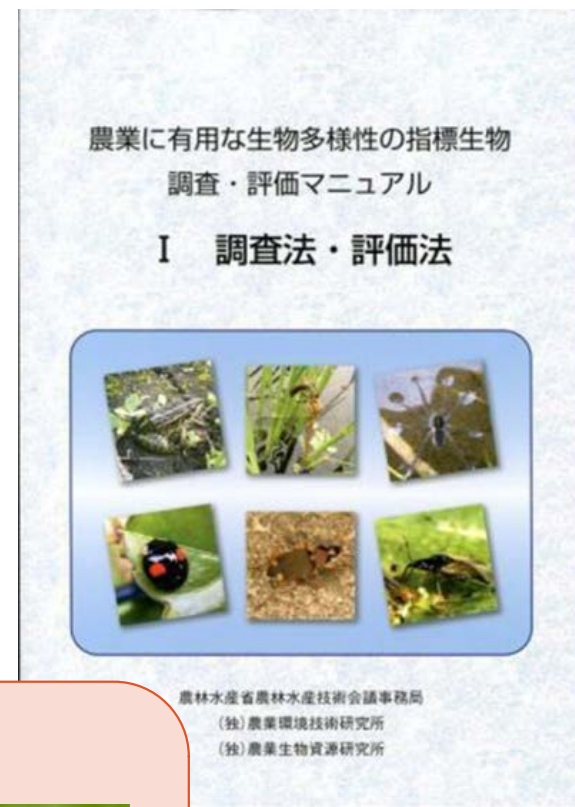
【調査方法】

農林水産省の委託プロジェクト研究により開発した

『農業に有用な生物多様性の指標生物調査・評価マニュアル』を活用

有機農業実践ほ場と慣行栽培ほ場で生きもの調査を実施

指標生物の個体数を比較



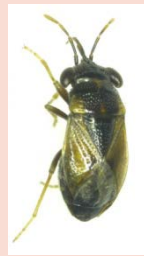
農業害虫の天敵となる捕食者



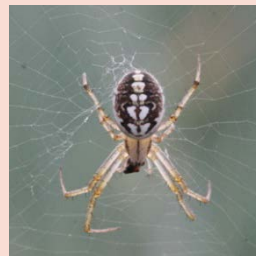
ゴミムシ類



コモリグモ類



捕食性カメムシ類



植物体上のクモ



寄生蜂



カブリダニ類

2-2 生物多様性保全効果の評価

○調査ほ場

実施区（有機農業）



対照区（慣行栽培）



○調査期間 平成29年8月下旬～10月上旬

○調査方法 ①ピットフォールトラップ
地上を徘徊する昆虫等を調査。



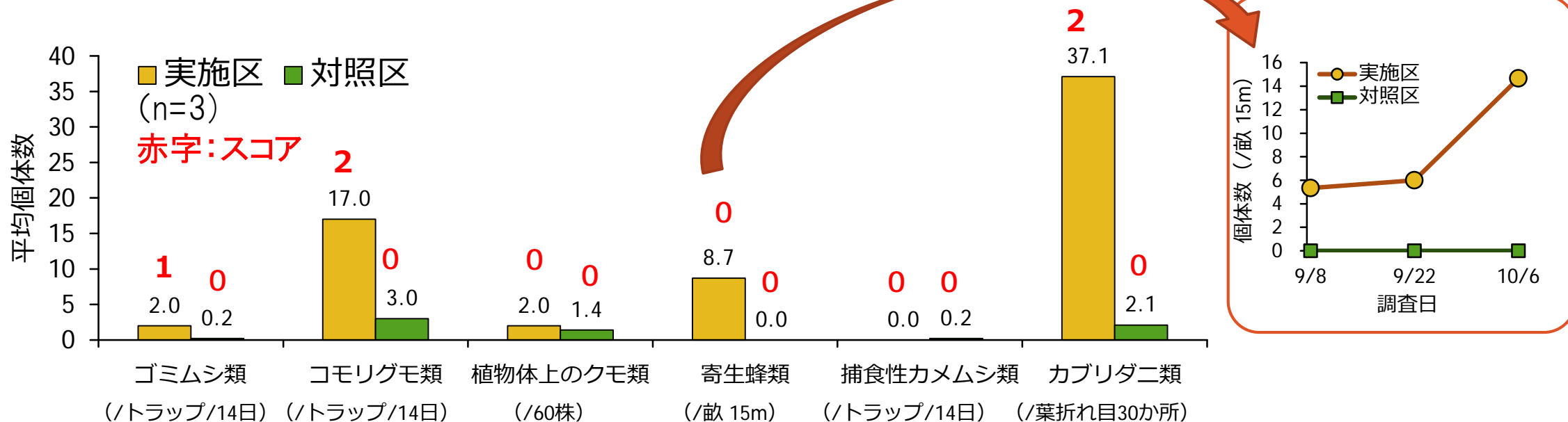
②見取り調査(3回)
植物体上のクモや昆虫をカウント。



※各ほ場3か所で調査、平均値を結果とした。

2-2 生物多様性保全効果の評価

【調査結果】



スコア	
実施区 (有機農業)	対照区 (慣行栽培)
5	0



評価(S~C)	
実施区 (有機農業)	対照区 (慣行栽培)
B	C

(参考) 全国の調査結果
有機農業・実施区

計	S	A	B	C
48	10	26	11	1
100%	21%	54%	23%	2%

3 施策の点検及び今後の対応

1 全国共通取組・地域特認取組

(1) 効果を高めるために必要な取組

- 地球温暖化防止効果を高めるため、緑肥とあわせて有機質肥料などの有機質資材を併用するよう指導する。

(2) 推進・拡大のために必要な取組

- 農業者への制度の周知
- GAPの普及・推進

3 施策の点検及び今後の対応

2 地域特認取組

取組名	実施面積(ha)							効果測定調査結果 (t-CO ₂ /年/ha)(S~C)
	24年度	25	26	27	28	29	30	
リビングマルチ	4.7	2.8	0.1	0.3	0.3	0.2	0.8	0.3(t-CO ₂ /年/ha)
草生栽培	0.3	0.3	0.3	0	0	0	0	—
冬期湛水管理	0	0	0	0	0	0	0	—



取組名	今後の対応方針
リビングマルチ	今後も地域特認取組として取り組んでいく。
草生栽培	27年度以降取組は行われていないため、廃止とする。
冬期湛水管理	取組実績は少ないため、廃止とする。

ご清聴ありがとうございました